

西海淵遺跡と西田遺跡の墓壙群について

小林 圭一

1. はじめに

西海淵遺跡（山形県村山市所在）と西田遺跡（岩手県紫波郡紫波町所在）は、集落の中心に共同墓地を配した環状集落の典型として著名である。いずれも縄文時代中期中葉の集落跡で、大木式土器分布圏に属しており、特に西田遺跡は定型的な集落構成から「縄文モデル村」と称され、縄文社会を考える上で最も好適な事例として、しばしば研究の俎上に載せられてきた遺跡である。一方西海淵遺跡は、縦長の建物を放射状に配置した集落構成から、「羽越パターン」の象徴として研究者の注目を集めてきたが、報告書の分析が不十分なため、検討の機会に恵まれてこなかったのが実情である。本稿では西海淵遺跡集落の紹介を通して西田遺跡墓壙群との対比を試み、縄文時代中期における社会構造の一端を垣間見てみたい。

2. 山形県西海淵遺跡の集落構成

西海淵遺跡は、尾花沢盆地の南西端を流下する富並川沿いの河成段丘上に立地する。集落は遺構が希薄な中心エリアから外周に向かって、墓壙群 土坑群 大型竪穴住居群の4重の同心円で構成されており、一部未調査区域を残すものの、その広がりには直径約120mの環状を呈している（図1）。集落中央の直径15m～17mの範囲は遺構密度が希薄で、その外側の内径15～17m、外径30～35mの範囲には約150基の墓壙が環状に集中する。さらに墓壙群の外環部から幅10～15m付近には土坑の夥しい集中が見られ、集落空間の外周に当たる内径約80m、外径約120mの環状の範囲には、50棟以上の竪穴住居跡が集中的に分布している。

集落構成の主体となる大型竪穴住居跡は、長軸10～15m、幅3.5～4mの長方形ないしは楕円形の長大な

平面形で、少なくとも26棟を確認することができる。いずれも個々のプラン上での建て替えが頻りに認められるのに対し、大型住居同士の重複は稀で、住居長軸線が放射状に配列されている。またこの区域には、直径6～7mの円形または楕円形プランの竪穴住居跡が少なくとも20棟検出されており、その多くは長方形大型竪穴住居跡を壊して構築されている。環状集落の形成は中期中葉大木8b式前半の大型竪穴住居の構築に始まり、大木8b式後半の円形・楕円形竪穴住居の構築を経て、集落構造に働いていた規制が崩れ始める大木9式前半に終焉を迎えたというような消長を辿っており、共同墓地を取り囲む集落構成は既に形成時にレイアウトされていたと考えられる。

墓壙群 西海淵遺跡で検出された墓壙は、長径1.5～1.8m、短径1m程の楕円形あるいは小判形の平面形を呈しており、底面は平坦に作出され、底面の周囲には幅10～20cmの溝を巡らせた例が多く見られる。検出面からの掘り込みは一般に浅く、遺物の出土は稀であるが、SM426から手形付土製品が出土している。墓壙同士は重複が著しく、正確な数量をカウントすることは困難であるが、分布状況から5～7単位の小群に分割される（図2）。即ち東群と西群に大きく二分され、さらに東群は2単位の小群（A・B群）、西群は3単位の小群（C・D・F群）に区分することが可能であろう。A群は25基以上、B群は30基以上、C群は32基以上、D群は16基以上、E群は39基以上で、墓壙の合計は142基以上となり、東群は55基以上、西群は87基以上と不均衡が生じている。

西海淵遺跡の墓壙は長軸方向に対する一定の規則性が弱く、放射状に並んだり円周方向を向いたものが混在するが、SM426を含むA群では、長軸方向に求心性をもって放射状に並ぶ例が多く認められる。長期にわたって



図1 西海淵遺跡の集落構成

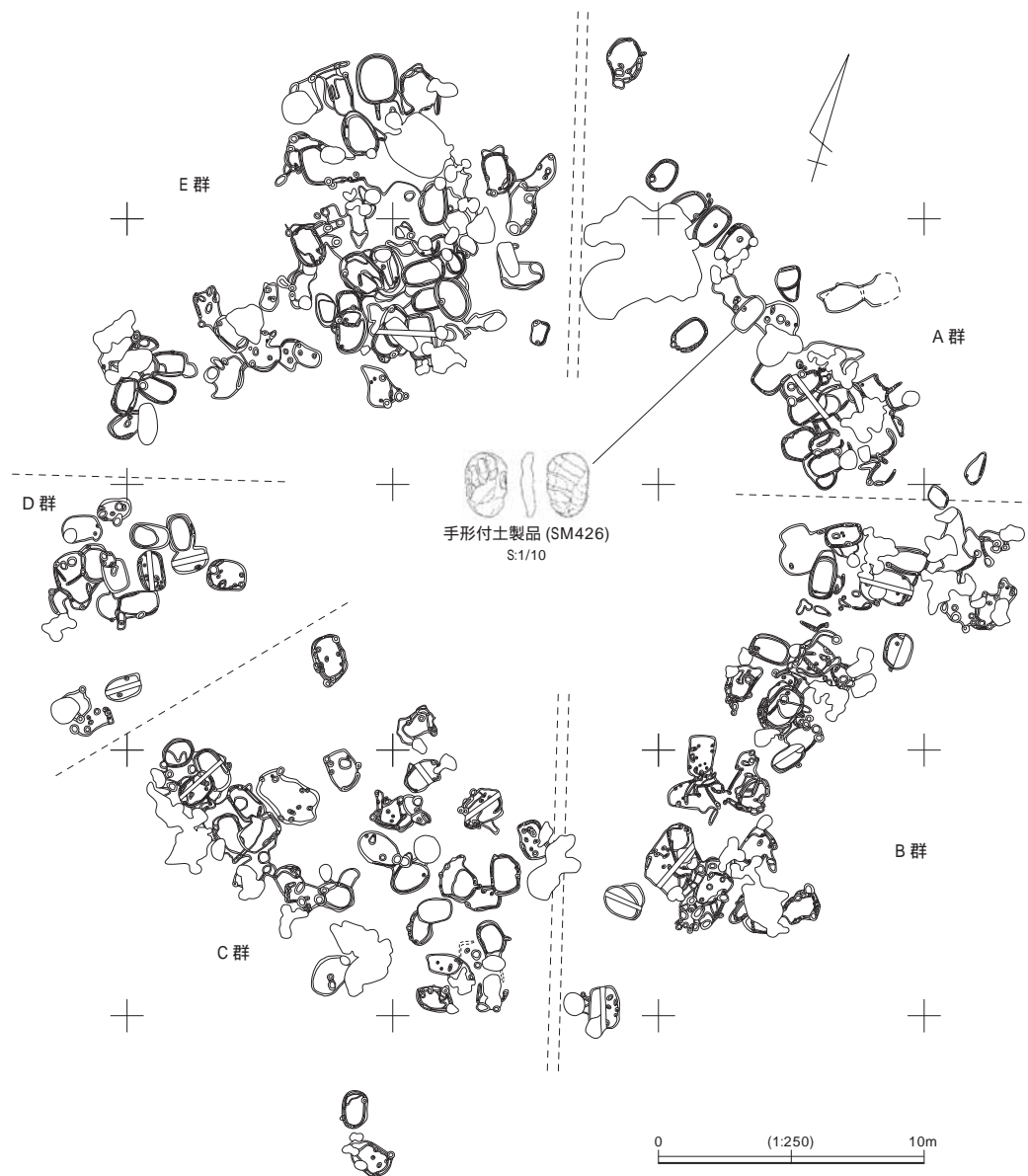


図2 西海淵遺跡墓壇群配置図

一定の場所に埋葬が繰り返されたことが、多数の墓壇が重複して切り合う結果となっており、埋葬小群が数世代にわたり踏襲されていたことが暗示される。しかし墓壇群で抽出された分節単位と大型竪穴住居群との間には、明確な対応関係を指摘することはできない。

3. 岩手県西田遺跡の集落構成

西田遺跡は北上盆地の北部、大木式土器分布圏と円筒式土器分布圏の接触地域に当たる岩手県紫波町南端

の独立丘陵上に立地している（図3）。同遺跡では竪穴住居35棟（大木8a式期14棟・同8b式期18棟）、墓壇192基、柱穴状土坑約1,450基（掘立柱建物53棟）、貯蔵穴129基が検出されたが、集落は墓壇群と掘立柱建物群の同心円状の構成を基本として、内帯（墓壇群）墓壇群 掘立柱建物群 竪穴住居群・貯蔵穴群の4重の同心円で構成される（図4）。東・西側の住居群の様相は明確でないが、集落は直径120mの円で収束しており、中央の直径30m内には墓壇が求心性をもって

放射状に並び、その外周の直径 35 ~ 60 m の範囲には掘立柱建物群、さらに外周には貯蔵穴群と竪穴住居群が混在している。集落の形成は前期末葉大木 6 式に始まるが、中期中葉大木 8a 式期には上記した環状集落としての完成された姿を示しており、続く大木 8b 式期には住居が集落の内側に迫り出し、掘立柱建物群や貯蔵穴群を壊すように構築され、集落構成に働いていた規制が崩れ始め、同式をもって終焉を迎えたというような消長を辿っている。

墓壇群 西田遺跡で検出された墓壇は 192 基を数え、遺跡の中心に占地している。東西にやや長い環状を呈し、外径 28 ~ 31 m、内径 12 ~ 19 m の範囲に 178 基の墓壇が集中して配されており、墓域中心部の内帯には 14 基の墓壇が北側と南側の 2 列に配列されている（図 5）。墓壇は殆どが小判形を呈しており、長軸方向を墓域の中心部に向けて放射状に並んでいる。その長軸方向には一定の纏まりが見られ、方位によって環状帯の 178 基の墓壇は 8 単位の小群（A ~ H 群）に区分される。小群は全貌が明確でない A 群を除くと、13 ~ 32 基の墓壇で構成されており、内帯に占地する墓壇も長軸方向で対応関係が指摘される。小群内では墓壇同士が重複するものの整然と配列されており、隣接する埋葬区とは余り重複せず、埋葬区の形成には厳格な区分原理が存していたと推定される。墓壇が求心性を有していることは、埋葬頭位の方向を規制していたことを示しており、頭位が集落の外側または内側のいずれかを向いていたことになろう。

墓壇の底面は舟底形ないし平底を呈しており、平面形の長軸は 1.2 ~ 1.4 m が半数近くを占め、1.5 m 以上は 27 基に過ぎない。検出面からの深さは 10 ~ 30 cm と浅く、覆土は殆どが単層からなっている。墓壇から出土した副葬品は G 群の GF561 ピットからヒスイ製大珠が出土したのみで、副葬品から墓壇の構築時期を特定することはできないが、遺構検出面からは大木 6 ~ 8b 式土器が出土し、その内の 9 割が大木 8a 式土器で占められることから、墓壇の造営時期は大木 8a 式期と推定されている。しかし後続する大木 8b 式の住居も墓壇を取り囲むように主軸方向を集落の中心に向けており、炉も中央寄りに片寄って構築される傾向にある。このことは大木 8b 式期においても墓壇が維持され、環状の規制を受

けていたことを示していると言えるであろう。環状構成は大木 8a ~ 8b 式にかけて形成・維持されており、墓壇も同じ時間幅で構築されていた可能性も否定できない。

掘立柱建物群 掘立柱建物は墓壇群の外環部にほぼ接するように、10 ~ 15 m 幅の環状帯で構成される。柱穴は柱痕が明瞭に観察され、掘方は直径 50 ~ 70 cm、深さ 55 ~ 75 cm が一般的で、4 ~ 9 基の柱穴を一つの単位として、方形ないしは亀甲形となる柱穴列で構成されており、長辺長が 3 ~ 8 m の掘立柱状の構造物であったと推定されている。柱穴同士の重複は顕著であるが、形状・規模・深さに柱穴列毎の規格性が認められ、想定される掘立柱建物の総数は 53 棟を数える。

掘立柱建物は長軸ないしは短軸方向に厳格な規格性が看取され、数棟単位で纏まりを有することから、a ~ j 群までの 10 群に区分することが可能である。それらは墓壇群の埋葬小群に対応しており、予め分割された区画の集合体としての様相を呈している。一つの墓壇群のブロックに対し、二つの掘立柱建物の小群が対応することになり、調査区外を含めると 16 の小群で構成された可能性が考えられる。1 小群当たり 3 ~ 9 棟で構成され、8 群からなる墓壇群の埋葬小群に対応させると、掘立柱建物は 10 棟以上が一つの単位となる。構築時期については、遺構検出面上や柱穴内から出土した遺物が大木 8a 式土器で占められ、また柱穴が大木 8b 式期の住居跡に切られていることから、墓壇群と同様に大木 8a 式期に形成されたと考えられている。

4. 両遺跡の墓壇群の比較

西海淵遺跡と西田遺跡の墓壇群を概観したが、前者では少なくとも 5 単位、後者では 8 単位の埋葬小群が抽出できる。埋葬区画は集落形成時に既に設定されており、その集合体としての様相をそれぞれ窺わせるが、居住域がその規制をどれだけ受けていたのが明確にすることはできない。但し大型竪穴住居群や掘立柱建物群の構築が終了した後も、居住区画内に住居が繰り返し構築されており、同一の出自集団による居住区画が踏襲され、その間も墓域は営まれていたと考えられる。環状集落では通常全体を大きく二分する構造（二大群の構造）が認められる（谷口 2005 : 90 頁）。西海淵遺跡では墓壇群が東



图3 岩手県西田遺跡全体図

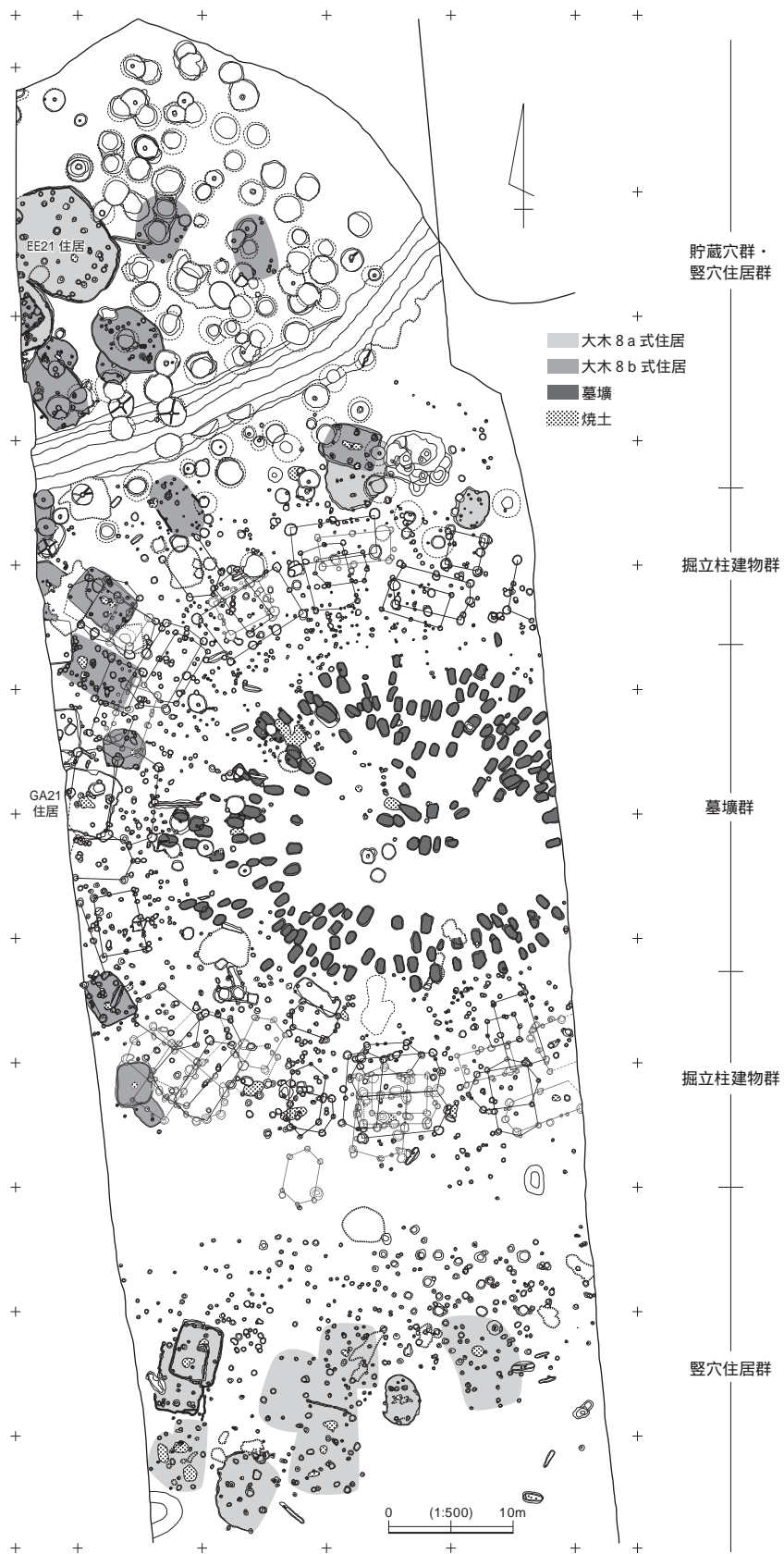


図4 岩手県西田遺跡の集落構成



図5 岩手県西田遺跡の墓壇群・掘立柱建物群配置図

表1 西海淵・西田遺跡の墓壇群の比較

	西海淵遺跡	西田遺跡
時期	大木8b式期主体 (大木8b～9式)	大木8a式期主体 (大木8a～8b式)
総数	約150基 (142基以上)	192基 (内帯:14基/外帯178基)
規模	外径:30～35m 内径:15～17m	外径:28～31m 内径:12～19m
形状	楕円形・小判形 長軸:1.5～1.8m	小判形 長軸:1.2m～1.4m
底面	平底/底面に周溝	平底・舟底形
特徴	重複顕著 求心性希薄	重複僅少 求心性顕著
小群数	5単位?	8単位
副葬品	手形付土製品	ヒスイ製大珠

西に二分され、西田遺跡では内帯の墓壇群が南北に二分される。しかし前者では大型竪穴住居群を明確に二分することが叶わず、後者ではその外環の墓壇群の埋葬小群が合致しない。「二大群の構造」原理を集落全体に適合させるには、なお検討を要すると思われる。

西海淵遺跡の墓壇は、埋葬小群内での重複が著しい。それに対し西田遺跡では重複が見られるものの、整然と配列される。墓域の形成期間は前者が長く、後者が短かった可能性も否めないが、前者は埋葬頭位の規制が緩く、後者には規制が強く作用していたと考えられる。しかし西海淵遺跡の一部の小群（A群）にも求心性は認められる。両遺跡で埋葬小群が抽出されるということは、死者がその集落の中に安置され、死後も集団の一部として祀られていたことを意味しており、埋葬小群が血縁原理によって組織された出自集団であった可能性が指示される（谷口 2005：108 頁）。また両遺跡では副葬品の僅少さが共通する。西海淵遺跡は手形付土製品、西田遺跡はヒスイ製大珠がそれぞれ1点出土したのみである。150～200基の墓壇が検出されたにもかかわらず、特別な施設も存在せず、墓壇自体に差異は見出せない。後・晩期に比べると、社会の階層化が進展していなかった可能性も考えられる。但し西田遺跡の内帯の在り方は、被葬者に対する特別な配慮が窺える。

西海淵遺跡の墓壇は楕円形や小判形で、底面は平底を呈し、周溝を巡らした例が多く認められる。壁面に木材

の板を張り付けた木棺墓であった可能性が考えられる。それに対し西田遺跡では小判形で、底面が舟底を呈する例が多い。また西海淵遺跡の墓壇の長軸は1.5m以上、西田遺跡では1.5m以下が多数を占めることから、前者では伸展葬、後者では屈葬が優勢であった可能性も考えられる。

西田遺跡の掘立柱建物群は、中期中葉としては特殊な遺構となっている。その性格は配列状況から、墓壇群と密接な対応関係が暗示される。直接共伴した遺物がなく、火の使用痕跡も殆ど認められないことから、「^{もがりのみや}殯宮」のような埋葬儀礼に関連した施設であったと想定されている。しかし神聖な共同の食料貯蔵施設と捉える見解や、大型柱穴の建物を一時的な施設と見なすことに否定的な意見も提出されている。その性格は未明のままであるが、東北北部の後期前半の環状列石の外環部に見られる掘立柱建物群は、西田遺跡の掘立柱建物群が継承されたものと理解するべきであろう。

集落の内部に空間的な分節構造が確認され、埋葬小群が存在し維持されていたことは、血縁関係を基軸として墓域が営まれていたと推定され、両遺跡は共同墓地・祭祀場としての機能を持った特殊な遺跡であったと評価することができる。両遺跡とも定住性の高い遺跡のため、石鏃等の狩猟具の出土量は少なく、磨石・凹石・石皿等の植物質食料の調理具類が多く出土している。また集落内には貯蔵施設であるフラスコ状土坑も多く形成されており、集落において植物質食料の調理・加工が活発に行われていた様相を窺うことができる。上記から、植物質食料に大きく依存した生業活動が、中期社会の存立基盤になっていたと推定され、両遺跡は通年居住された集落であると共に、一定期間周囲の遺跡から集住し、共同作業や祭祀が執り行われていた可能性が指摘される。

引用文献

- 小林圭一 2012 「富並川流域における縄文時代の遺跡動態 - 西海淵・川口・宮の前遺跡の検討を通して - 』東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 研究成果報告書 』 pp.125 - 198 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』 学生社